

J2.992:1

1 079

\* HOKAZŌ

These need to be  
fitted in the  
Js

67/14  
C



放下僧



放<sup>ホ</sup>下<sup>カ</sup>僧<sup>ゾ</sup>

一連<sup>ハツギリ</sup>

これは下野<sup>スミ</sup>の國の住人牧野の左衛門何某が

子に小次郎と申す者にふさても親にやう者

は。相模の國の住人利根<sup>ノグトシ</sup>の信俊に討たれてふ。

我等が親の敵<sup>カタキ</sup>の事。近國<sup>キナクニ</sup>に於て其の隠れ無

くふどもかれは猛勢我等は兄弟<sup>キョウテイ</sup>なりぞは

放<sup>ホ</sup>下<sup>カ</sup>僧<sup>ゾ</sup>



一連

只今冬事餘の儀に非ず。我等が親の敵の  
事、近國に於て其の隠れ無くは程に。何ともして

討たばやと存じ。談話の爲に冬よりては

一落着く

げよく我等が親の敵の事。心に隙無く思ひ

ヒマ

くども。かれは猛勢我等は兄弟なりては無

く程に。思ふにかゝる無くは。まづ時節を御待

放下傳



無くゆ程に。思ふにかひ無く。又兄にても者は。

モトヨキ  
髪断りあたり近き寺に御入りゆ程に。立ち

越え此の事を談合せばやと存ぞ。いかに

此の内へ案内申の  
誰にてわたりゆぞ

小次郎殿とやこなたへ

御入りゆ。さて是今は何の爲の速出にてゆぞ



虎臥す野邊に出で、狙ふ。或夕暮の事なり  
しに。虎に似たる大石のありしを。敵虎と心得  
番<sup>ツガ</sup>る矢なればよびひいて放つ。其の矢則ち叢<sup>イワオ</sup>  
に立ち。血流れけり。とこそ。承りてゆへ。唯思  
召し。歩立ちゆへ。面白き壁言を引いて承り  
は程に。たあらは思ひ立たりするにや。また



しゝ連 カウテ

ちひ  
親の敵を討たぬ者は不孝の身

キヨオ

と承りひものを  
それは瞋恚邪性の人の

シンニ

シヨオ

申し習はしたる非行にて

ギヨオ

しゝ連

や

キヨオ

親の敵を討つて孝に供へたる謂はれのみ

しゝ

其の謂はれは

しゝ連 シツカリ  
モロコ

唐の事にやありけん。

ハツ

母を惡虎に取られ、其の敵を取らんとして。百日

モ、カ



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

な有明のヤケ名残もさぞな有明のつれなきなが

ら存ナガロある命ぞ限り兄弟は其の心をや頼む

らん其の心をや頼むらんシツメ 中入

歩みを運ぶ神垣や歩みを運ぶ神垣や隔て

ぬ誓頼まシツメんこれは相模の國の住人利根の

信俊と申す者にてか。さても此程打續き夢見

放下僧

四

一



彼の者には何とて近づきしむ

今程(サツリ)

人の翫びは放下の程に。放下の姿に沛成り

あれかゝと存ポロ

いざ強さらばとリ立サツリ

思ひ立ち修行の道に赴けば

我連も嬉サツリ

く思ひて放下の姿に身を拾ヤツ

さサツもすど

す連と

故郷の名残もさぞ同音



一カハツテ知チらラずスなナらラはハ迷ミふフらラん  
一カハツテ落ラク花カ一カハツテ陽ヤウのノ春ハル

知チらラずスなナらラはハ迷ミふフらラん

落ラク花カ一カハツテ陽ヤウのノ春ハル

をヲ知チらラずス白ハク雲ウン青セイ山サンにニ覆フふフか

流リウ水スイ山サン

此コノ秋アキにニて

紅ベニ葉ハをヲ争アザふフ色イロとトかカめ

上ウヘ諸モロ掛ケ

同音

朝アサのノ嵐ラン夕ユフべベのノ雨アメ朝アサのノ嵐ラン夕ユフべベのノ雨アメ今イマ日ニチ又マタ明アカ

日ヒのノ昔ムカシぞゾとト夕ユフべベのノ露ツキのノ村ムラ時トキ雨アメ定サダメめメ無ナシきキ世ヨにニ

古コ川カハのノ水ミヅのノ泡ウタガハシ沫ウタガハシ我ワレいイかカにニ人ヒトをヲあアだダにニやヤ思オモふフ

放下僧



悪くは程に瀬戸の三島に参詣仕りし。

いかに誰かある瀬戸の三島に参詣申さるすゝめ  
狂言シテ

船を用意仕りし。また某が苗字を申しな  
ツレガシ ミヨオ

上  
（サヤカニサリ）

面白の我々が有様やな。僧俗二つの道を離  
（サヤカニ合ハス）

れて姿詞も世の常ならず。  
（連） 其の振

舞を隠家と。思ひ捨つれば安き身を



は何と申シツカリひぞ。いや、苦シツカリかりぬ事シツカリにせよ。  
狂言シガ

放下が参りたると申シツカリひぞ。  
わき凡そ沙門シツカリ

としらば。忍辱二諦の衣ニシニクニタイを著コロモ、罪障スミ懺悔スミの

袈裟リキを掛け、十力の數珠リキを手に纏リキひて、僧

とは申すべけれ。異形ギヨオの扮装イデタチ心得シユずい。又挂

杖チヨオに團扇チヨオを附チヨオけて持チヨオち給チヨオふ。團扇チヨオの一句

放下僧



狂言

呼びよ此の者は面白き  
イデタチ  
扮装にふ、名を尋ね  
狂言

一連

浮雲流水と申し

狂言シカ。

某は浮雲あれなうは

流水と申し候。さてお尋ね。御方の漢苗字



一連 （カンテツ）

それ弓と申すは本来に烏兔（カウチ）の象を表し淨（アラハ）

穢（ヒヨオ）不二の祕法を表す。されば愛染明王も神（シニツカリ）

通の弓に智慧の矢を爪あて（カシ）て。四魔（カチミ）の軍を

破り給ふ（サウ）。されば我等もこれを持ち（サウ）

されば我等もこれを持ち（サウ）。ぬらぬ弓放さぬ矢（サウ）

に射る時は中らず而も外さざりけり（サウ）。かゝるに（サウ）

放下僧



清りたる

それ團扇と申すは、動く時は

清風を出し、<sup>イタ</sup>静なる時は、明月を見ず。明月清

風唯同性。<sup>シヨオ</sup>諸法を心<sup>シ</sup>が所作と<sup>サ</sup>す。眞智修行

の種なれば、我等が持つは道理なり。答へ給ふ

ぞ愚なる。團扇の一面自り<sup>シヨカリ</sup>。今又は

弓矢を帶<sup>シ</sup>給ふ。これもお僧の道具ずりか



も説かれず言句に出せば教に随ちて文字を立

つれば宗體に背く。唯一葉の翻る風の行く

を淨賢見せよ

わき 咲くは

さて座禪の公案何と心得

いづき

一連 かつて

入るは幽玄の底に徹し。出でば

三昧の門に遊ぶ

自身自佛はさていか

白雲深き處金龍躍る

生死に住せば

放下僧

ハ



詠む歌も有り知らずな物な宣ひそ知らずな  
物な宣ひそ  
（シツメ）  
わき（サラリ）  
これは禪法の言葉にて

ある間、苦からずい。尚々尋ねき、事のい、放

下僧とは何れの祖師。前佛は何と傳へいぞ

（シウテイ）  
宗體が承りたる  
（シウカリ）  
我々が宗體と申

すは、教外別傳にいふ言を言はれず説くに



一上 (改メサラシ)  
サシ (抱子合念)  
されば大小の根機を嫌はず持戒破戒を擇は

ず 同音  
有無の二偏に落つる事無く皆成佛

は疑ひ無しされば草木も皆法身の姿を見

し柳は緑花は紅なる其の色々を表せり

△は舞  
曲△  
(小) 青陽の春の朝には谷の戸あづる鶯の凍れり

涙融け初め雪消の水の泡沫に相宿りす

放下僧



輪廻の苦

生死を離れば

断見の科

さて向上の路は

斬る三段と為す

あ、斬る三段と為すとは我等が禪法の

言葉なるを。お駭きあるこそ思なれ

太鼓  
打出  
キク

同音

何と唯なかに。岩手の山の岩躑躅。色には

出で。南無三寶をかく人の心や

服経言  
セリフ



こゝろに  
の聲、夕べの煙朝霞皆これ、三界唯心の理な

りと思ふ、心を悟り給へや、  
風に

任する浮雲の  
種と心や、なりぬらん

面白の  
花の都や、筆に書くとも及ばず

東には、祇園清水落ち来る瀧の音羽の嵐に

地主の櫻は散り散り、西は法輪、嵯峨の浄寺

放下僧



る蛙の聲カワ聞キけは心ココロの有アるものを目メに見ミぬ秋  
を風フウに聞キき萩ハギの葉ハ戦ソコぐ古里コリの田面タノに落オつ  
る雁カ鳴ナきて稻葉イナバの雲クモの夕時ユフジ雨アメ妻戀メケひか  
ぬる小牡鹿コウジカの佇トモむ月ツキを山ヤマに見ミて指ユビを忘ワスレる思オモ  
有アリり由良ユラの湊ミナトの釣舟ツリフネは魚イサを得エて釜カマ  
を捨スつこれを見ミかれを聞キく時は峯ミネの嵐ハルカや谷タニ



一 (サフリ)

かな

いづまでかて長らふべきと

ト連 (トイ) 兄弟

共に抜きつれて

(ホリ)

此の年月の怨の末今と

そ通れ願の儘に敵を討つたりけるかて

キヨガダイ

兄弟念力のかくて兄弟念力の其の期<sup>ゴ</sup>の有り

て忽ちに親の敵を討つ事も孝行深き故により

名を末代に留めけり名を末代に留めけり

放下僧

土



廻<sup>マワ</sup>らは廻<sup>マワ</sup>れ水車の輪の井堰<sup>セキ</sup>井堰の川波川柳  
は<sup>チ</sup>水に揉<sup>チ</sup>まるゝふくら雀<sup>セキ</sup>は竹に揉<sup>チ</sup>まるゝ  
野邊<sup>ススキ</sup>の薄<sup>ススキ</sup>は風<sup>ススキ</sup>に揉<sup>チ</sup>まるゝ都の牛は車<sup>チ</sup>に揉<sup>チ</sup>  
まるゝ茶<sup>ウス</sup>礮<sup>ウス</sup>は挽<sup>ヒキ</sup>木<sup>ヒキ</sup>に揉<sup>チ</sup>まるゝげ<sup>チ</sup>は真<sup>チ</sup>忘<sup>チ</sup>れ  
たりとよこきりこは放<sup>チ</sup>下<sup>チ</sup>に揉<sup>チ</sup>まるゝこきりこ  
の二つの竹<sup>チ</sup>の代<sup>チ</sup>々<sup>チ</sup>を重<sup>チ</sup>ねて打<sup>チ</sup>治<sup>チ</sup>まりたる御<sup>チ</sup>代<sup>チ</sup>



千九百四十四年六月

喜多流謡曲之内

榎本暢弘写之